

「己を知れば邪心なし」——。
データサイエンス時代と
超高齢社会を見据えて
“世界に飛翔する
知と癒しの匠”を育成する

将来の医療環境を見据え
患者さんと共に生きる医療を

今、医学・医療を巡る世界の環境は大きく変わりつつあります。東京医科歯科大学では10年後、20年後の医学・医療はどのようなかをシンクタンクで議論しているのですが、気候変動一つとってもそれによって医療は変化してくるのです。局所的な豪雨によってもたらされた災害は環境汚染により感染症を発病させ、多くの負傷者も出ます。本学では大学院に共同災害看護学専攻のコースを設けていますが、災害医療も重要になってきます。戦争やテロリズムとも無縁ではありません。

また、日本をはじめ欧米先進国では今、急速な少子高齢化が進み、超高齢社会を迎えようとしています。こうした中で、医療の分野では先制医療と在宅医療が中心になりつつあります。先制医療は「個別化予防医学」で、個人の遺伝的背景を基にした一次予防をいいますが、老いも若きも元気に病気をせずに人生を送るための医療です。がんの遺伝子診断に基づくプレジジョン・メディスンも進めなくてはなりません。

こうした中で、我々はどんな医療人を目指すべきなのか。それが、東京医科歯科大学の基本理念である「知と癒しの匠を創造し、人々の幸福に貢献する」の中に凝縮されています。ここでいう「知」とは、知識と技術と自己アイデンティティであり、「癒し」とは教養と感性、多様性を受け入れるコミュ

ニケーション能力のことと言えます。どんなに技術や知識があっても、己を知らなければ医療人として失格です。患者さんの多様性を理解しなければいけません。己がしっかりしていないと、その多様性を受け入れて、専門家として正しい助言をするのが難しくなります。そこで、「知」に自己アイデンティティが加わるのです。

相手の心を理解した上で、専門家としての助言ができること、なおかつ一緒に悩む、苦しむのが医療人です。だからこそ、人間としての教養、感性とコミュニケーション能力が欠かせないのです。患者さんは一人ひとりみな違います。患者さんのバックグラウンドについての理解を含めた全人的医療が求められているのです。

データサイエンス時代に
求められる「知と癒しの能力」

ICT(インフォメーション・アンド・コミュニケーション・テクノロジー=情報通信技術)や、AI(人工知能)の進歩を背景にビッグデータやIoT(Internet of Things)、ロボティクスに関わるデータサイエンスは今や必須なものとなってきました。東京医科歯科大学では来年度から大学院の改革を実施。「先制医歯理工学コース」を新設して、医療ビッグデータを統合し解析するための疫学、統計学、数理学の知識を持ち、的確な分析・解析ができる人材や、センシングのデバイスと同時にデータ取得技術を開発できる人材を養成していきます。

しかし、ここで大切になってくるのが「知と癒しの能力」です。AIのデータ処理能力は人間の比ではありませんが、AIは自ら課題を見つけて自ら解決を見つけることはできません。また、AIが進歩して患者さんと少しぐらいの会話ができるようになって、最終的にその病気のバックグラウンドを考察して正しい判断をできるのは「知と癒しの能力」をもった医師なのです。ICTやAIが進歩する時代にこそ、逆に「知と癒しの能力」はますます必要となってきます。そして、超長寿社会になればなるほど、尊厳を持って死を迎えるにはどうすればいいか、という「死生観」も重要になってきます。死生観につ

いての教育を充実させるとともに、それを社会に啓発していくことも私たちの大切な役目です。

こうした医療人の道に進むため、高校時代には先ほど述べた教養と感性、多様性を受け入れるコミュニケーション能力の3つを身につけてほしいと思います。教養とは、幅広い知識と精神の修養などから来る創造的活力や心の豊かさ、理解力であり、状況の変化に広い視野から的確に対応できる力と定義することができます。感性は、外からの刺激に応じて何らかの印象を感じ取る、その人の直感的な心の働きであり、その感じたことを何らかの形で表現する力です。

そのためには、失敗を恐れないことが大事です。自分は何者で何ができるかという自己アイデンティティを身につける経験をぜひ積んで欲しいと思います。失敗は、それを養う方法の一つなのです。そして、IT(インフォメーション・テクノロジー)のスキルと知識を習得しておくこと、医療の世界にやりがいを感じて医療人になろうという強い意思をもつことが大切です。

「グローバルヘルス」の推進に
寄与できる人材を育成

文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援」タイプA(トップ型)に採択された本学の「TMDU型グローバルヘルス推進人材育成構想:地球規模での健康レベル向上への挑戦」は、世界トップクラスの長寿国であり、医療レベルと国民皆保険をはじめ保険医療の分野の制度が充実しているわが国の経験と実績を踏まえて、世界の健康レベルの向上に貢献しようというものです。この実現のため、来年度から大学院にグローバルヘルスリーダー養成コースを新設するなどグローバルヘルスを推進する人材の育成に全力を尽くしています。

本学では、これまでも野口記念医学研究所共同研究センター(ガーナ)、東京医科歯科大学・ラテンアメリカ共同研究拠点(チリ)、チュラロンコン大学・東京医科歯科大学研究教育協力センター(タイ)の3つの海外拠点に医学科や保健衛生学科、歯学科、口腔保健学科の学生を派遣して

います。また、海外の医療人材育成にも力を入れており、チリ大学及びタイのチュラロンコン大学とのジョイントディグリー(共同学位)プログラムが日本で初めて認められました。さらにガーナ大学やマヒドン大学との連携の強化を図っていく計画です。

世界からの高い評価を受け
全人的医療の実現を目指す

これからの医療をさらに充実させていくためには、医学・歯学・工学の連携体制をより強化すること、全人的医療の実現を目指すことが求められています。昨年は、「統合教育機構」と「統合国際機構」を設置しましたが、今年に入り、医学・歯学・工学の連携研究の原動力となる「統合研究機構」と、IRの推進など全学の情報戦略を企画立案できる「統合情報機構」、それに「統合診療機構」を新設しました。すでに超高齢社会に備えた「長寿・健康人生推進センター」が稼働しています。

東京医科歯科大学は、今年3月、英国の世界大学評価機関クアックアレリ・シモンズ(QS)が発表した分野別QS世界大学ランキングで、歯学分野において日本第1位、世界第3位に選出され、医学分野も日本第4位の高評価を得ました。これからも「教職員と学生が誇りと気品に満ち、生き生きしている」「患者さんは本学の病院を信頼し、受診していることを誇りに思う」「同窓生が胸に本学のバッヂを付け、それぞれの社会で活躍している」という大学の将来像の実現に向け、「積極思考で全力を尽くす」「己を知れば邪心なし」の精神をモットーに、「世界に飛翔する知と癒しの匠」の育成に全力を注いでいきます。

Yasuyuki Yoshizawa

1972(昭和47)年、東京通信病院医師。1979(同54)年、米国ウイスコンシン医科大学客員教授。その後、筑波大学臨床医学系講師、東京医科歯科大学医学部助教授、同大学院歯学総合研究科教授、同大保健管理センター長、同大医学部附属病院副院長などを歴任。2008(平成20)年、同大理事、副学長、2014(同26)年4月から同大学長。

東京医科歯科大学
学長

Special Interview

吉澤 靖之
先生

① ICT(情報通信技術)や、AI(人工知能)、IoT(Internet of Things)のめざましい“進化”に伴い、データサイエンスは今や医療の世界でも必須となり、医療ビッグデータの構築が急務となってきました。また、自然環境の変化や超高齢社会の到来も医療のあり方を大きく変えようとしています。そうした中で医療人はどうあるべきなのか。医療の道を志す若者は何を学べばいいのか。「知と癒しの匠を創造し、人々の幸福に貢献する」ことを掲げる東京医科歯科大学の吉澤靖之学長にお聞きしました。